

優しさのバトン

茨城キリスト中

三年

長山 ながやま

未和 みわ

ある日の、学校から帰るときのことでした。

見慣れた風景の中、私はバスに揺られていま

した。バス停でバスが止まります。乗り込ん

できたのは外国人の四大家族。少し日本語が

話せるお父さん、日本語が話せないお母さん。

小学校低学年くらいのお兄ちゃん、一、二

歳の女の子でした。お兄ちゃん、小さい妹

が乗るベビーカーを掴んで立ち、お父さんは

娘を抱いて座り、お母さんも空いている席に

腰を下ろします。私をはさんで前後の席に座、

たお二人は、か、と話をしています。どち

らかに席を譲ろうか、私はとても迷っています

した。と、い、う、か、譲るべきだ、というこ、とは

分かりき、ていたので、す。しかし、私の体は

動きません。そのうち、ご家族が降りるバス

停に着きました。お父さんが運賃を払う間、

三人は乗車用ドアから出て、いいの、か、分から

ないようでした。すると、バスに乗って、いた

二人の女性の方が、乗車用ドアを指差し、
「さっさと出ていって！」
と三人に降車を促し、お兄ちゃんも赤ちゃん
を抱いたお母さんだけでは危ないと思っただの
でしよう、てきはきとベビーカーを降りし始
めたのです。三人とベビーカーが無事に降り
ると、運賃を払い終えたお父さんは片言でも
「ありがとうございます、ありがとうございます」
と何度もお礼を言っていました。私は心が動
かされました。少しもためらうことなく人を
助け、言葉の壁を優しさで軽々と超えて、赤
ちゃんに「かわいいね」と声をかけ、皆に
まぶしい笑顔を向けるお二人を心から尊敬し
ました。同時に、深く後悔しました。どうし
て席を譲れなかったのだらう、どうして勇気
のなさを席を譲れない言い訳にしたのだらう
と。そして、自分の自己中心的な考えに気付
き、これからは自分の中の葛藤など超えて動
ける人にならうと強く心に決めました。どん

な相手に対して、自分に手伝えることがあ
れば真^っ先に手を差し伸べられる人になりた
いのです。あのお二人から、境界なく笑顔で手
を差し伸べることの大切さを教わりました。
これは、動くべきだと分かっていたながらも動
けなかつた私に対しての、次は助けてね、と
いうバトンだったのだと思います。お二人か
らの笑顔と助け合いのバトンをしっかり受
け継ぎ、今度こそは、恥や勇気の無さなど、
自分の心の中にある障害物に足を止めること

なく、走り抜けたいのです。

あれから数カ月。学校の帰りのバスのステッ
プに整理券が落ちていました。助け合いのバ
トンを思い出し、今度こそ行動しようと思
い、運転手さんに渡すことかできました。する
と、ありがとうね[。]。
のお言葉を頂きました。スターラインから、
少しは走り出せたでしょうか。この調子で、
笑顔と助け合いのバトンを握り、思いやりの
道を走り続けられるよう、頑張ります！